

モンゴル国・ウランバートル市における生活空間計画に関する研究（その 10）

日大生産工（研） ○杉本 弘文
日大生産工 川岸 梅和

1. はじめに

本研究は、モンゴル国・ウランバートル市における生活空間計画に関する一連の研究の中に位置づけられるものである。筆者らは、これまでにモンゴルの集合住宅地区及び遊牧民を対象として、居住者の意識・活動特性、生活・居住空間の実態を調査し、その比較・分析を通して、人・活動・空間の関係性を検証し、遊牧民の環境負荷の少ない暮らしやモンゴル独自の生活・居住空間の在り方等について検討してきた。

本稿では、遊牧民の有する環境負荷の少ない生活・居住環境に着目し、遊牧民と集合住宅居住者の意識特性・活動特性についての比較・分析から、遊牧民と集合住宅居住者の生活実態を把握する。同時に、「遊牧」と「定住」（都市集合住宅）という異なる生活形態に着目し、意識と活動の実態の比較を通して、人・活動・空間の関係性が生み出す生活環境の状況にどのような類似性や差異性が顕在しているかを考察することで、モンゴル固有の地域特性に基づく都市部での定住（都市集合住宅）における生活・居住環境の構築に向けた基礎的知見を得ることを目的としている。

2. ウランバートル近郊に暮らす遊牧民世帯の概要

1990 年の市場経済化以降、遊牧民は畜産品の出荷に関して自力で市場に流通させなければならなくなった。このことにより、多くの遊牧民が市場に近い都市近郊や定住地域の周辺、幹線道路の近くなどに宿営する傾向が近年みられるようになってきている。また、遊牧の途中で都市に立ち寄り、数週間のみ都市外縁部に滞在し、遊牧生活を続ける世帯もみられる。^{注1)} 本研究においては、このような近年の動向を踏まえた上で、ウランバートル近郊に暮らす遊牧民を対象に調査を行い、生活活動・行為の実態と生活意識の傾向的特性を明らかにする。

本研究において調査対象としている調査地 A（Tuv aimag（県）Zuunmod sum（郡））及び調査地 B（Tuv aimag（県）Bayanchandamani sum（郡））共に、約 20 km 離れた場所に sum の中心街区があり、役所、文化センター、博物館、病院、学校、銀行などの施設が整備されていると共に、日用品や食料品などの商店が立地しており、両中心街区共に遊牧民にとって必要な生活用品はおおよ

そ確保することができる。中心街区の周辺には定住ゲル地区が形成されており、集合住宅や木造家屋、レンガ家屋で中心街区に定住している人々も存在する。尚、詳細な調査地点については図 1 に示す通りである。

3. ウランバートル市街地の調査対象集合住宅の概要

調査対象集合住宅が立地する BAYANGOL 区 Tumor Zam（第 2 号）地区は、1964 年に設立され、鉄道の開通（ウランバートル駅）と共に発展した。1976 年から 1986 年頃にかけて多くの集合住宅が建設され、ウランバートルの代表的な集合住宅地区のひとつとなった。2009 年現在、Tumor Zam（第 2 号）地区の人口は 10,601 人であり、人口の 100% が集合住宅に居住している。尚、BAYANGOL 区の人口は 175,000 人であり、そのうち約 70% が集合住宅居住者である。

集合住宅居住者を対象に調査を行った BAYANGOL 区 Tumor Zam（第 2 号）地区の集合住宅地区は、筆者らがこれまで一連の研究（既発表論文 1）～3）のなかで対象として

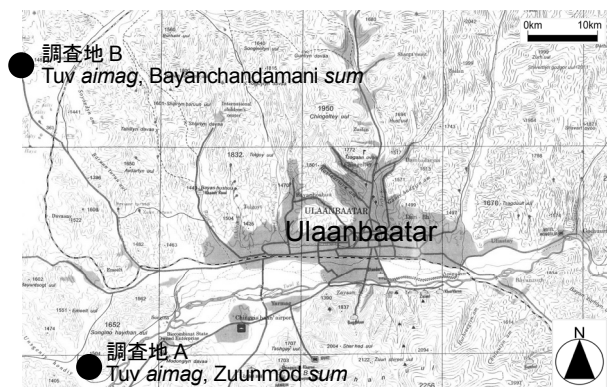


図 1 遊牧民に対する調査・調査地

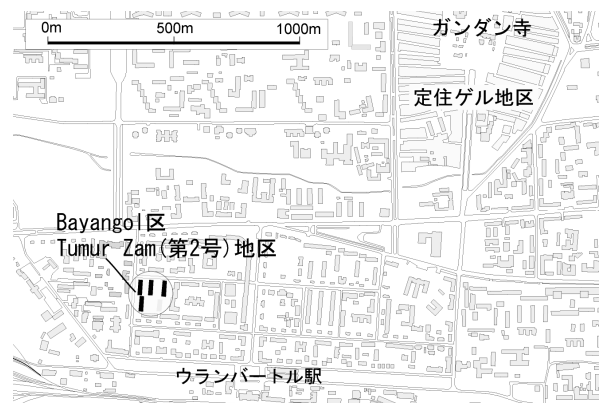


図 2 調査対象集合住宅地区

いる集合住宅地区である。1979年に竣工された平行型配置形態、住戸形式は階段室型でレンガ造5階建て、総住戸数240戸である。ウランバートルの都心部から南西に約2.5kmに位置し、旧鉄道省に隣接する施設が多い地区である。管理組合が役員16名で組織されており、総会は年1回以上行われている。尚、位置については図2に示す通りである。

4. 研究の方法

本研究では、先ずウランバートル近郊に暮らす遊牧民を対象として、2006年8月に遊牧民の生活意識、生活・コミュニティ活動等に関するアンケート調査及びヒアリング調査を行った。

調査を行った地点は既報^{既発表論文4)～7)}と同様に調査地A (Tuv aimag (県) Zuunmod sum (郡)) 及び調査地B (Tuv aimag (県) Bayanchandamani sum (郡)) の2地点であり、各々ウランバートルから約50km及び80km圏域に位置している^{注2)}。アンケートの配布・回収の方法に関しては、両調査地共に調査の中心地点とした遊牧民世帯からその周辺(半径約5km圏)の全遊牧民世帯を対象として直接訪問し、調査の主旨を説明した上でアンケートを配布すると共に、回収についても配布と同様に各世帯を直接訪問し回収した。アンケート調査は各世帯を対象に1部ずつ配布し、世帯主より回答を得た。尚、本論文においては、1)遊牧民は、数世帯が集まってホト・アイル^{注3)}と呼ばれるグループを構成して宿営地をつくり、遊牧生活を行っていること、2)遊牧民にとって夏季は、他の季節に比べ温暖な気候や様々な牧畜作業と収穫により、1年で最も快適な季節を過ごすことのできる時期であると共に、遊牧民にとっては、他の季節に比べ宿営地に多くのゲルが集まり、世帯同士及びグループ(ホト・アイル)同士が協力関係を持ち、共同作業や祝宴(祭りや儀礼)が最も盛んに行われる時期であること等を考慮し、他の季節とは異なった特徴を有する夏季(8月)の宿営地において調査を行った。

次に、ウランバートル市街地内(都市部)に暮らす集合住宅居住者を対象として2007年9月に生活意識、生活・コミュニティ活動等に関するアンケート調査を行った。居住者アンケートは世帯主を対象に行い、配布及び回収は直接訪問により行った。両調査の概要については表1の通りである。尚、アンケート調査の内容は、両調査に共通して、居住者の基本属性、1日(平日・休日)に行う生活活動・行為、近隣世帯との協同・協働活動の状況、生活・コミュニティ意識、自然環境・周辺環境への意識、生活・居住環境評価等であり、本

表1 アンケート調査の概要

遊牧民に対するアンケート調査			
	調査地A	調査地B	合計
配布数	28	29	57
回収数	28	29	57
回収率	100%	100%	100%
集合住宅居住者に対するアンケート調査			
配布数	120		
回収数	98		
回収率	81.7%		

稿では、1日の生活活動・余暇活動、近隣世帯との協同・協働活動について比較・分析を行う。

5. 遊牧民及び集合住宅居住者の生活・居住空間の実態

遊牧民が構成するホト・アイルの空間構成調査(実測調査)を行った結果、ゲルの用途の組み合わせとして「住居(居室)のみ」で構成されるもの、「住居(居室)+キッチン」で構成されるもの、「住居(居室)+キッチン+倉庫」で構成されるものの3パターンに分類できることが明らかになっている。^{既発表論文7)}ホト・アイルにおいては、ゲルを多様な用途(住居(居室)、キッチン、倉庫)に使い分け、その用途に応じてゲルの大きさ(面積)を変化させている^{注4)}。加えて、ホト・アイルに集まる世帯数、保有している家畜数、季節による活動の差異等によって、ゲルの数や用途・大きさ(面積)、各ゲル間の間隔距離を変化させ、生活空間を構成しており、生活・居住空間を柔軟に変化させながら季節によって異なる多様な生活・コミュニティ活動を展開している。

本報における調査対象集合住宅地区は、筆者らがこれまで一連の研究のなかで対象としているBAYANGOL区Tumur Zam(第2号)地区であり、立地特性として、周辺には大規模な病院が立地し、販売施設・店舗、集合住宅が多く立ち並んでいる地区であることが挙げられる。^{注5)}また、屋外共用空間においては、住棟の出入口付近にしつらえられたベンチが活動・行為(「会話を楽しむ」「休息をする」等)の中心的な受け皿になっていると共に、屋外共用空間内に整備されている運動場において「スポーツをする」「子どもの遊び」の活動・行為が活発であること、等が挙げられる。集合住宅居住者における活動・行為はベンチや遊具、運動場等、空間のしつらえによる影響を強く受ける傾向があり、遊牧民にみられた柔軟な空間利用や多様な活動の展開はみられない。

5.1 生活・余暇活動の傾向的特性

各調査対象世帯に対し、アンケート調査と共に1日(平日・休日)の活動内容及び活動時間を記入する調査シートを配布し、世帯主より回答を得た。調査によって得られた1日の活動状況を基に、活動項目毎に活動時間量を算出した^{注6)}。有効回答を得た世帯は、遊牧民では36世帯(人)^{注7)}、集合住宅居住者では、平日:

40 世帯（人）、休日：32 世帯（人）である。

遊牧民の活動の特性を整理すると、各活動項目における活動時間量の上位 3 項目は「放牧」「搾乳」「乳製品づくり」となっている（表 2）。また、遊牧民はこのような生活活動を行っている中で、「会話を楽しむ」「子どもの遊び」「運動をする」「ラジオを聞く」「ペット（犬）と遊ぶ」等の余暇活動を同時に楽しんでいる。

集合住宅居住者の活動の特性を整理すると、平日・休日共に、活動項目のうち「食事をする」「休息する」「テレビを見る」が上位 3 項目となっている（表 3）。平日・休日の活動状況を比較すると、「郊外（草原地）に行く」の時間量が休日のみにみられる。これはウランバートル郊外（草原地）に別荘（ズスラン）を持つ都市生活者の多くが、休日に草原に行く傾向があることを示しており、都市居住者が自然環境を求めて草原に回帰する情況が顕在していると考えられる。

両者を比較すると、遊牧民における主要な活動は生活活動が中心であり、平日・休日に関係なく、こうした生活活動を行う中で余暇活動を相互に重なり合わせながら展開している。また、生活・余暇活動の場（空間）として、遊牧民においては、ゲル内やゲル周辺に極めて近い場所で活動が展開されているのに対し、集合住宅居住者では住居内以外に、市街地中心部の繁華街や都市郊外等での活動時間量が多く、身近な生活空間内での活動は活性していない傾向がみられる。

5.2 近隣コミュニティに関する意識（図 3）

これまでの研究により、近所付き合いの状況に関しては、遊牧民の近所付き合いは積極的な傾向があり、集合住宅居住者においては近隣の世帯との関係性が希薄な傾向があることが明らかとなっている注9）。

本稿においては、アンケート調査より得た自由意見より、近隣コミュニティ（近所付き合い）に関する意見を抽出・整理し、協同・協働活動の状況を考察した。

遊牧民においては、多くの世帯が近隣世帯と協同して生活する良さを感じており、高い協同意識を持っている。一方で、互いに協同関係を持つことで生活を維持していることや家畜を多く保有すると隣人関係がでにくいなど遊牧生活特有のひとと人の関係性を有していると言えよう。また、アンケート調査から遊牧民が行っている主な協同・協働活動を抽出すると、家畜の世話（生殖・飼養、哺乳・搾乳管理）、乳製品づくり、草原の手入れ（草原地の管理、家畜の飼料となる草刈等）、フェルト作り、井戸の管理等が挙げられ、協同・協働活動の内容は広範囲に及び、季節毎に異なる共同作業（主として牧畜作業）や祝宴（祭りや儀礼）に関して、近隣の世帯同士が協同して行っている。

表 2 遊牧民の活動特性注8)

				1F1G	2F1G	3F1G	4F1G	合計		
主要活動項目	ゲル内及びゲル周辺での活動	牧草地での活動	生活活動	放牧 (小屋に入れる等も含む)	活動時間量(分)	5130.0	5070.0	3360.0	3960.0	17520.0
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	466.4	460.9	480.0	565.7	486.7	
			家畜の世話 (水やり等)	活動時間量(分)	270.0	375.0	420.0	360.0	1425.0	
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	24.5	34.1	60.0	51.4	39.6	
			搾乳	活動時間量(分)	1395.0	1650.0	1335.0	705.0	5085.0	
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	126.8	150.0	190.7	100.7	141.3	
		生活活動	掃除	活動時間量(分)	585.0	735.0	120.0	120.0	1560.0	
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	53.2	66.8	17.1	17.1	43.3	
			乳製品づくり	活動時間量(分)	1455.0	750.0	525.0	435.0	3165.0	
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	132.3	68.2	75.0	62.1	87.9	
			馬乳酒づくり	活動時間量(分)	375.0	240.0	180.0	285.0	1080.0	
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	34.1	21.8	25.7	40.7	30.0	
	余暇活動	食事をする	活動時間量(分)	405.0	810.0	135.0	270.0	1620.0		
			1日1人当たりの活動時間量(分/人)	36.8	73.6	19.3	38.6	45.0		
		お茶を飲む	活動時間量(分)	615.0	450.0	135.0	405.0	1605.0		
			1日1人当たりの活動時間量(分/人)	55.9	40.9	19.3	57.9	44.6		
				世帯数(回答数:人数)	11	11	7	7	36	
				総活動時間量(分) 〔主要活動項目以外も含む〕	10980.0	10770.0	6840.0	6810.0	35400.0	

表 3 集合住宅居住者の活動特性注8)

			平日	休日	
主要活動項目	生活活動	家事 (洗濯等)	活動時間量(分)	180.0	1110.0
			1日1人当たりの活動時間量(分/人)	4.5	34.7
	余暇活動	食事をする	活動時間量(分)	4020.0	3390.0
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	100.5
		テレビを見る	活動時間量(分)	1860.0	3270.0
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	46.5
		休息する (フリータイム)	活動時間量(分)	1920.0	2520.0
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	48.0
		郊外(草原地)に行く	活動時間量(分)	0.0	1080.0
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	0.0
		散歩をする	活動時間量(分)	180.0	1740.0
				1日1人当たりの活動時間量(分/人)	4.5
	ショッピングをする	活動時間量(分)	240.0	1440.0	
			1日1人当たりの活動時間量(分/人)	6.0	45.0
			世帯数(回答数:人数)	40	32
			総活動時間量(分) 〔主要活動項目以外も含む〕	9810.0	17730.0

集合住宅居住者においては、概して近所付き合いに対し不満が顕在化している傾向があり、居住者同士の関係性をほとんど持っていない状況が窺える。また、「集合住宅居住者の生活や彼らの社会交流について、行政や機関（組合等）から何も行われない」等、居住者自らが自発的に他の居住者との関係性を築く意識が弱く、集合住宅での生活・居住空間の整備や生活・コミュニティ活動に関して、「管理組合の活動の改善が必要」「共同生活や住環境の質の向上等、快適な暮らしに組合がもっと責任を取るべき」といった行政や管理組合への不満が挙げられ、集合住宅の管理・運営及び共用空間の保守等に関して、管理組合に依存している状況がみられる。また、アンケート調査より集合住宅居住者が行っている主な協同・協働活動を抽出すると、清掃、共用設備（階段室の照明、街灯等）の手入れ、集会・会議等が挙げられたが、「参加したことがない」「どんな活動をしているか知らない」といった意見も

遊牧民	集合住宅居住者
一緒に働けるし、幸せも苦しみも分け合える。 近所の家庭と親しい関係を持っているのでお互いによく助け合っている。 物の貸し借り、テレビを見に行ったり、仕事も協力してくれるので有難く思っている。 家畜の世話や水汲みなどで協力し合う。留守にする場合、搾乳もしてくれる。 遊牧生活を続けるために、できるだけお互いを助け合う。 近隣世帯とあまり親しくないのに、仕事などの協力はしていない。	（協同活動は）行われたことがない。 （協同活動が）行われているか分からない。 居住者間での協同活動はなく、独立して住んでいる。 協同活動に参加したいが、他人があまり参加しないのでやる気を失う。 近隣の人々同士が知り合い、防犯への取り組みを行っていく必要があると思う。 生活環境を改善するために、隣人同士が知り合うことが重要。 何かあった場合、隣家の人とコミュニケーションをとる。 （近隣に）知り合いがいない。 人間同士の信頼関係が悪い。 個人の生活レベルが異なっているため、お互い人間関係を持たない。 お互いを尊重し合うことが段々となくなっていることが心配。 個人主義の者が多くなり、住民同士の協力やコミュニケーションが不足している。 自分のことしか考えない人であふれ過ぎている。自分の住んでいるスペースのことだけを考え、ポーチや集合住宅周辺の環境には目を向けていない。 共同生活や住環境の質の向上等、快適な暮らしに組合がもっと責任を取るべき。 管理組合の活動の改善が必要。 管理組合の活動を改善し、管理人の責任を向上させることが必要。 集合住宅居住者の生活や彼らの社会交流について、行政や機関（組合等）から何も行われない。自分のことしか考えない個人の集まりが暮らしている。

図3 近隣コミュニティ（近所付き合い）に関する意識（背景の色なし：良い評価、色あり：悪い評価）

多く挙げられた。

近所付き合いに関しては、遊牧民世帯は他の世帯と関わり合いを持ちながら、協同・協働活動を行い、遊牧生活を営んでいる状況が窺える。一方、集合住宅居住者は、同じ住棟内や集合住宅地区内での隣人関係は希薄であり、協同・協働活動への参加意識が低く、協同・協働活動は活性していない状況がみられる。

6. まとめ

本稿より得られた知見をまとめると以下のようである。

- 1) 遊牧民は、日常生活の中で生活・余暇活動や生業である牧畜作業を、身近な生活空間内で家族や近隣の世帯と協同・協働して行い、そうした種々の活動を通じて良好な近隣コミュニティを育み、草原地を利用・保全し、環境負荷の少ない暮らしを実践していると言えよう。一方、集合住宅居住者は、近隣世帯間のコミュニティが希薄な傾向があり、「ショッピングをする」や「郊外（草原地）へ行く」等、居住する集合住宅地区以外（市街地中心部の繁華街や都市郊外）での個人や家族単位での生活・余暇活動の時間量も多い。
- 2) 近隣コミュニティの状況をみると、遊牧民の方が活性している傾向があると共に、高い協同意識を基盤として、近隣世帯同士の協同・協働活動により良好な生活環境（草原地）を維持・管理している。一方、集合住宅居住者は、生活環境の維持・管理（共用空間の保守、設備の保守・点検等）において管理組合に依存（委託）している状況がみられると共に、協同・協働活動への参加意識は低く、集合住宅地区内のコミュニティは停滞している。

居住者の参加による協同・協働活動を通じたコミュニティ意識の高まりと種々のコミュニティ活動の活性は、良好な生活環境の創出と維持に大きく寄与すると言えよう。また、都心部（ウランバートル）の集合住宅地区において近隣コミュニティを活性させるためには、身近な生活空間内において行う日常的な生活・余暇活動、協同・協働活動の創生とその受け皿となる空間の具現化が望まれると言えよう。

注釈

- 注1) 遊牧と都市との関係性において、第一に遊牧民が都市に近づくパターン、第二に都市定住生活者が都市から離脱し遊牧に帰帰するパターン、第三に都市と草原の間を往来するパターンがみられ、市場経済化によって従来からの遊牧民と都市定住生活者の生活関係に新たな関係が構築されつつあることが、近年の動向として報告されている。（参考文献1）による）
- 注2) 両調査地でウランバートルまでの距離に差がみられるものの、ウランバートルから約80kmの地点に位置する調査地Bに関しては近くにウランバートルに繋がる幹線道路が整備されており、車による移動では調査地AとBでウランバートルまでの所要時間に大きな差はみられない。
- 注3) モンゴルの遊牧民は白いフェルトで覆われた天幕（ゲル）に各家族（世帯）が暮らしており、この世帯をアイルという。遊牧民は通常、数家族が連なって生活しており、このグループをホト・アイルという。
- 注4) 2006年8月に行った現地調査より、遊牧民が居室（住居）に利用している平均的なゲルの大きさは約28㎡（5壁型ゲル）である。また、遊牧民のゲルの骨組みは壁材（ハナ）、屋根を支える柱（バガナ）、屋根をつくる芯（骨）（オニ）、円形の天窓（トーン）からできており、ゲルの大きさはハナをいくつ繋げて円形に組むことで決定される。一般的にハナを4〜5枚繋げてできたゲルの大きさを住居としている遊牧民が多い。
- 注5) 集合住宅居住者の生活・居住空間の実態を把握するため、これまで集合住宅に付随する屋外共用空間（コモンスペース）における土地利用区分面積量と活動実態（既発表論文1）、集合住宅を中心とした半径500m領域における施設分布状況（既発表論文2）、集合住宅の平面構成（既発表論文2）等について報告している。
- 注6) 各活動項目について、活動時間量より1日1人当たりの平均消費時間量として換算し、整理した。尚、集合住宅居住者の活動特性に関しては、仕事（労働時間）を除く活動項目より時間量を算出している。
- 注7) アンケート・ヒアリング調査によると、遊牧民の平日及び休日に関わらず1日の生活行動パターンは各世帯によって決まっており、毎日同様の活動が繰り返されている。そのため、遊牧民においては、平日・休日共に同様の活動を行っているものとし、分析している。
- 注8) 調査より抽出された活動項目（遊牧民：19活動項目、集合住宅居住者20活動項目）から、一人一日当たりの活動時間量が30.0分/人以上の活動項目を主要活動項目として抽出している。
- 注9) アンケート調査において、近所付き合いの状況を「1.親しくお付き合いをしている世帯がある」「2.生活していく上で協力し合っている世帯がある」「3.顔見知り程度の世帯がある」「4.ほとんど近隣の世帯を知らない」「5.その他」の5項目にて調査したところ、遊牧民では1・2と答えた世帯の割合が約82%を占めた。一方、集合住宅居住者では3の割合が33.0%で最も高く、次いで4の割合が29.5%となった。（既発表論文6）による）

本論文に関連する既発表論文

- 1) Mitsuhiro Hasegawa, Umekazu Kawagishi, et al. (2004.5) Study on the Living Space Planning in Ulaanbaatar, Mongolia - Common Spaces in Apartment Complexes - Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.3 no.1, 133-140
- 2) Umekazu Kawagishi, et al. (2005.5) Study on the Living Space Planning in Ulaanbaatar, Mongolia Part 2 - Residential and Living Environments in Apartment Complexes - Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.4 no.1, 151-159
- 3) Umekazu Kawagishi, Hirofumi Sugimoto, et al. (2005.11) Study on the Living Space Planning in Ulaanbaatar, Mongolia Part 3 - Perceptions of Apartment Residents - Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.4 no.2, 415-422
- 4) Hirofumi Sugimoto, Umekazu Kawagishi, et al. (2007.11) Living Environment of Nomads Residing on the Outskirts of Ulaanbaatar, Mongolia - Dispositional Characteristics from the Perspective of a Comparison of Nomads and People Living in Ger Fixed Residences in the City-, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, vol.6 no.2, 283-290
- 5) 杉本弘文, 川岸梅和, 他：遊牧民と集合住宅居住者の比較からみた生活環境に関する生活・コミュニティ意識の傾向的特性について - モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究 - 日本建築学会技術報告集, 第14巻, 第27号, pp.213~218, 2008年6月
- 6) 杉本弘文, 川岸梅和, 他：モンゴル・ウランバートル近郊に暮らす遊牧民の生活環境に関する研究 - 遊牧民と集合住宅居住者の生活・コミュニティ意識に関する比較・検討 -, 2007年度 日本建築学会関東支部 審査付き研究報告集3, pp.53~56, 2008年9月
- 7) Umekazu Kawagishi, Hirofumi Sugimoto, et al. (2010.5) Living Environment of Nomads Residing on the Outskirts of Ulaanbaatar, Mongolia Part 2 - Lifestyle and Living Environment from the Perspective of Perceptions and Activities-, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, AIJ, AIK, ASC, Vol.9 No.1, 139-146

参考文献（前報に準ずる）

- 1) BIO-City 2001/No.20（モンゴル・遊牧と都会のあいだを彷徨う人々―ウランバートル周辺に暮らす遊牧民の実態調査報告―ボルジキン・ブレンサイン [P.104~107]）株式会社ビオシティ 2001年4月